

日本建築学会優秀卒業論文賞・ 優秀修士論文賞

経過報告



本会では、1989年7月に設立された日本建築学会「建築教育振興基金（タジマ基金）」による、学生を対象にした論文の顕彰事業で、「優秀卒業論文賞」「優秀修士論文賞」を設け、優れた論文を表彰している。本年はその第8回である。

本年は、第一次選考を重視すべく、卒業論文の概要を修士論文同様4頁とした。また、昨年まで応募時に提出していた指導教員による推薦理由書は、選考の妨げになりかねないため提出不要とした。

幸い多くの方から応募があり、早速、卒業論文等顕彰事業委員会の中に選考部会（部会長：新宮清志日本大学教授）を組織して選考に入った。同選考部会では、短期間であったが精力的に作業が進められ、厳正なる選考が行われ、表彰論文を決定することができた。

今回受賞された論文の著者に対して心からお祝い申し上げるとともに、選考部会のご努力に改めて敬意を表す。また、残念ながら選考にもれた論文も内容的には表彰論文と大差なく、いずれの論文も優秀であり、応募に際してのご努力を多とするものである。

この事業は本年で8回目であるが、この顕彰事業の意義はますます高い評価を得るものと確信している。

本年の公募に際して多大なご尽力をいただいた各大学の関係者に心からお礼申し上げますとともに、今後も本事業に関して深いご理解をいただき、さらなるご協力を賜るようお願いする。

分野別応募数（総応募数136編／39大学等）

構造系卒業論文17編／5	計画系卒業論文28編／7	環境系卒業論文10編／3
構造系修士論文20編／4	計画系修士論文43編／8	環境系修士論文18編／3
構造系論文合計37編／9	計画系論文合計71編／15	環境系論文合計28編／6

※編のあとの数字は受賞数

（卒業論文等顕彰事業委員会委員長 村上雅也）

選考報告



1989年に設置された建築教育振興基金（タジマ基金）による「卒業論文等顕彰事業」は、1997年で8回目となる。選考部会は卒業論文等顕彰事業委員会の中に組織され、常設の11の調査研究委員会から推薦された各2名（ただし、構造、環境は各3名）の委員、計24名により構成された。

第1回選考部会は、村上雅也卒業論文等顕彰事業委員会委員長より招集され、1996年12月17日に建築会館会議室で開催された。選考委員の自己紹介の後、村上委員長より、選考部会長として新宮清志が指名・承認された。さらに、村上委員長より本事業の運営等について説明があり、運営規程、実施要領、選考要領の確認を行い、前年からの申し送り事項等について審議し、次のような変更がなされた。

1. 1997年（第8回）の募集から、応募時に提出する概要の頁数を、学部卒業論文も大学院修士論文同様4頁とする。これにともない、関連する規程類を修正した。
2. 1997年（第8回）の募集から、応募時に提出していた指導教員の推薦理由書については提出不要とする。
3. 第二次選考回答用紙の各評価項目の評価メモを削除し、総合評価に評価メモを付すこととした。

第2回選考部会は、1997年4月21日に開催し、応募論文数とその部門別分類の確認を行い、部門変更などがなかったことを確認した。応募論文数は、卒業論文55編、修士論文81編、計136編

で、昨年とはほぼ同じであったが、応募大学数は39大学で、昨年より4大学少なくなった。部門別では、構造系37編、計画系71編、環境系28編であった。選考要領について再度確認を行い、選考の基本的な方法は従来どおり二段階選考とした。第一次選考では、部門別の選考委員が論文概要を精読して授賞候補論文数の約2倍の論文を選考し、第二次選考では、選ばれた論文1編につき2名の査読委員を定めて本論文を精読し表彰候補論文を選考することとし、具体的な選考は各部会に一任することとした。応募論文数にもとづき、各選考部門別の授賞候補数を決定し、各部門ごとにこの論文数の範囲内で選考を行い、他部門との振り分けなどはしないことを確認した。部門別部会を設置して部会長を互選（構造系：石丸辰治君、計画系：近江隆君、環境系：吉野博君）し、選考を開始することとした。なお、選考は公正かつ慎重に行うことを旨とし、特に選考委員と応募論文の著者が親族、師弟関係などにある場合には、その論文の選考に関わらないことを確認した。

第3回選考部会は、1997年6月24日に開催し、各部門の部会長から選考経過と選考結果が報告された。各部会の選考結果にもとづき審議し、選考部会出席者全員的一致をもって1997年（第8回）の表彰候補論文として、卒業論文15編、修士論文15編を選考した。

（1997年卒業論文等顕彰事業委員会選考部会長 新宮清志）

構造系部会

本年の構造系の応募論文数は、卒業論文17編、修士論文20編であり、昨年とはそれぞれ1編ずつ減っているが大きな変化はなく、応募大学数は18校でやや常連校が目立った。

第一次選考では、6名の選考委員がそれぞれ専門に近い分野の論文の査読を行い、卒業論文12編、修士論文13編を選出した。

第二次選考では、各本論文を2名の選考委員で精読し、卒業論文では、「テーマと内容」「論理性と明確さ」「論文としてのできばえ」について、修士論文では、「テーマの独創性・新規性」「豊かな萌芽性・将来性」「研究の進め方の論理性」「結論の明確さ」「論文としてのできばえ」を評価項目として選考した。いずれの論文もレベルが高く、分野も広がっていることから選考に苦慮したが、最終の絞り込みでは、各項目ごとの点数の重み平均が総合評価と認識し、査読にあたった選考委員の意見や評価メモなどを通じて総合評価をふまえながら慎重な審議を行った結果、構造系部会としての授賞候補割当数である、卒業論文5編、修士論文4編を授賞候補論文として推薦することとした。

この種の選考には必ず伴う困難であるが、著者本人の独創性の評価に難しさを感じる。構造系では、テーマの選定、研究の進め方は、指導教員もしくは所属研究室の研究レベルに負うところが多い。昨年と異なり指導教員による論文に対する推薦理由書を取りやめたことが、著者本人の独創性の評価をより容易にしたか否かは判断に迷うところである。いずれにしても、水準の高い論文が相当数あり、授賞候補数の制限から授賞候補として断念せざるを得なかった論文もあり、学生諸君はもとより指導教員のご理解により、応募数の増大を強く期待するものである。（構造系部会長 石丸辰治）

計画系部会

本年の計画系の応募論文数は、卒業論文28編、修士論文43編の計71編で、昨年と比較し11編の減少となった。特に卒業論文は17編も減少した。しかし、一昨年以前の傾向と比較すると、むしろ定常状態に戻ったともいえる。いずれにしても、全体の応募論文の過半数を計画系論文が占める状態に変わりはない。

第一次選考では、授賞候補数（卒業論文7編、修士論文8編）の2倍程度を目安として選出することとした。論文概要をもとに、建築史、建築計画、都市計画と大きく3つにグループ分けし、それぞれ専門に近い委員を各論文1編につき5名を割り当てた。委員は査読結果を3段階評価し、それぞれの評価点順位と評価分布の傾向を検討し、その結果、卒業論文13編、修士論文16編を第二次選考の対象とした。

第二次選考では、選出された29編の本論文をより精緻に検討するため2名の選考委員を選定し、卒業論文では「テーマと内容」「論理性と明確さ」「論文としてのできばえ」などを、また修士論文では「テーマの独創性・新規性」「豊かな萌芽性・将来性」「研究の進め方の論理性」「結論の明確さ」「論文としてのできばえ」などを評価基準として選考した。査読評価の高い順に1論文ずつ質疑・意見交換を行い、賞に相応しい論文内容であるかを検討した。最終的には、研究分野の違いによる論文スタイル、論文の力点の置き方とそれを評価する側の視点の違いが問題となった。特に、今回は評価点が僅差のものが多く、論文本文の文章を読み上げて比較する接戦となった。こうした過程を経て、授賞候補数である卒業論文7編、修士論文8編を授賞候補論文として選定し推薦した。

本年の評価では、概要と本論文とのギャップが目立った。特に、卒業論文概要を4頁にしたにもかかわらず、卒業論文でそれが目立ち、修士論文と比較して選考の難しさを感じた。

（計画系部会長 近江 隆）

環境系部会

本年の環境系の応募論文数は、卒業論文10編、修士論文18編の計28編であり、応募論文数は過去最高となった。研究分野は、卒業論文、修士論文ともに、音、振動、熱、空気、光、設備、心理などあらゆる分野にまたがっていた。

第一次選考では、4名の選考委員が全員ですべての応募論文を査読し、3段階で評価し、評点の上位のものから授賞候補数（卒業論文3編、修士論文3編）の約2倍にあたる卒業論文6編、修士論文7編を選定した。

第二次選考では、選考委員4名と専門委員12名の計16名（1編当たり2名、13編×2名で26名であるが、選考委員は複数担当）で本論文を精読した。卒業論文に対しては、「テーマと内容」「論理性と明確さ」「論文としてのできばえ」の3項目について、修士論文に対しては、「テーマの独創性・新規性」「豊かな萌芽性・将来性」「研究の進め方の論理性」「結論の明確さ」「論文としてのできばえ」の5項目について、それぞれ評価した。これらの項目にさらに総合評価を加えた各委員の評点（項目評価は5段階、総合評価は3段階）と講評をもとに、選考委員間で慎重に検討を行った結果、卒業論文3編、修士論文3編の授賞候補論文を選定し、選考部会に報告した。

今回は、多くの論文が応募されただけでなく研究分野も幅

広く分布し、また質の高い論文も多くみられた。したがって、授賞候補論文の絞り込みに苦労したという面もあったが、これは卒業論文・修士論文の顕彰にとって望ましい方向であるといえる。今後とも、さらに多くの論文が応募されることを望む次第である。(環境系部会長 吉野 博)

推薦理由 (優秀卒業論文賞)



分級フライアッシュを使用した高強度コンクリートの強度予測式の作成に関する研究

正会員 大久保敏彦 君 (宇都宮大学)

本研究は、石炭灰から生成する分級フライアッシュを使用した高強度コンクリートの強度発現性状について、分級フライアッシュの強度性状におよぼす影響の程度を予測する式を実験的に検討・提案したもので、研究テーマは今日的であり重要な領域である。

実験研究はともすれば、実験結果の羅列になりがちであるが、本論文は実験研究として正統的である。

結果として、強度発現におよぼす分級フライアッシュ混入効果を表す等価係数を提案するなど新規性を認めることができ、材料系の卒業論文として優秀である。

マクロゾーンネーションによる都市の地震災害評価

正会員 倉沢延寿 君 (芝浦工業大学)

正会員 女屋 智 君 (芝浦工業大学)

本論文は、都市災害という観点から、わが国の主要都市のおかれている現状と地震危険度に関する膨大な資料を収集・解析し、将来わが国に生ずるであろう地震に対して都市災害の予測を試みたものである。

この分野の研究は、耐震工学という面のみならず社会工学などの側面からの知見も必要になり、かつ不確定な要素を含まざるを得ないのが現状である。

本論文では、都市群のほか、危険度要因の抽出、多変量解析結果に対する検証について、多少の未熟さはあるものの、卒業論文として莫大なデータの収集解析を行い得た努力は高く評価できる。

弾性棒を伝わる地震による応力波の影響

正会員 橋本貴史 君 (京都大学)

本論文は、兵庫県南部地震における建造物の被害のひとつの原因が、衝撃的な応力波による破壊ではないかという視点から論理の組み立てを試みたもので、非常にタイムリーなテーマである。波動論にもとづいた原理的な説明に立脚して理論を積み重ねている点に好感が持てる。

減衰を全く無視していること、境界条件の設定がやや現実性に欠けているのが惜しまれるが、論理の明確さとその展開は、学部学生のものとしては優れており、将来の発展に期待を抱かせる論文として高く評価される。

倍力機構を用いた制振デバイスに関する基礎的研究

正会員 本間 剛 君 (日本大学)

正会員 帆刈大慈 君 (日本大学)

本論文は、一昨年の阪神・淡路大震災により耐震技術を世界的に誇っていたわが国の建築界が大打撃を受け、建物の安全性をいかに評価すべきか議論されてきた背景を踏まえ、既存の建物にも適応可能で、かつ高い対地震構造安全性能を付与しうる制震機構を提案したものである。これは、倍力機構と補助質量を組み合わせ、構造物に組み込むことにより構造物の地震応答を低減できるという理論にもとづいている。

本論文は、特に制震機構を組み込んだ構造物模型を対象に、その基本的な性質を解析的に把握し、かつ実験により提案した制震機構がきわめて効果的であることを明らかにしており、卒業論文として高く評価されるものである。

小口径杭載荷実験等に基づく大口径杭の先端支持力の推定

正会員 山川太一 君 (京都大学)

本研究は、極限支持力付近まで行われた小口径杭の載荷実験、あるいは小沈下量域までしか行われていない大口径杭の載荷実験結果から、大口径杭の極限支持力付近までの先端支持力特性を遺伝的アルゴリズムなどを用いて推定する方法を示したものである。

杭先端の荷重-沈下関係という現実的な問題を、ある曲線(関数)から答としての曲線(関数)を求めるといった数学的な問いと解の関係に置き換えてアプローチしている点はユニークである。

論理展開の確実さと明快さ、結果の検証による妥当性の確認などとともに、今後の発展性や応用性も予感させられるもので、卒業論文として高く評価できる。

景観整備事業が住民意識に与える影響に関する研究 長野県小布施町における景観整備事例の分析を通して

正会員 浅川貴史 君 (日本大学)

正会員 浦島靖子 君 (日本大学)

本論文は、住民参加型まちづくりにおいて、景観整備が果たす役割を詳細な実態調査をもとに、その意義と有用性について論じたものである。

研究内容として、景観整備が住民意識の変化と住民参加によってその整備効果を上げるものとする仮説にもとづき、景観整備による個人意識の変化、自宅の景観に対する配慮への変化などといった広範な角度から、住民意識からみた景観整備による影響を検証したものである。特に住民の発意によって主体的に修景されたプロセスを6段階に分けることを試み、それぞれについて住民意識形成と整備内容を明快に論考している点については高く評価できる。

論旨の展開がやや分かりにくい点や、ケーススタディとした

モデル地区の捉え方に強引なところもみられるが、卒業論文としてレベルが高く、顕彰に値するものとしてここに推薦する。

阪神・淡路大震災における情報の実態と今後のあり方 被災者の視点でとらえた分析

正会員 岡野佳穂子 君 (日本女子大学)

阪神・淡路大震災における情報を様々な角度から考察し、被災者の視点から被災現場における情報流通の担い手として新聞配達と郵便配達に着目し、文京区での今後の情報拠点としての可能性を検証し、最後に郵便局を最もそれに相応しいものと結論づけている。

結論に至る過程の分析には不明な点や厳密性に欠けるところがあるが、発想がユニークで全体のストーリー展開に説得力がある。

従来の実証的研究とも違う、いわば一定の客観性をふまえつつ、資料を駆使しながら自己の分析視点やアイデアのリアリティを説得的に構成し、その過程を通じて最後に確信に至る著者の認識の過程を二重写しに見せて新鮮である。

直江津の擬洋風建築 いかや旅館を中心に

正会員 高原町子 君 (日本工業大学)

本論文は直江津の町並みに感動した著者が、その擬洋風の建築群を、特に傑出した「いかや旅館」に焦点をあて、その建設時の時代背景、施主の擬洋風建築への思い入れや思考、大工を探り、さらに施主に影響を与えた長野県の類似建築やドイツ人などとの関係を明らかにし、見事に直江津という一地方の擬洋風建築の生成と発展、変化過程を解明している。

論文のまとめ方には改良の余地があるが、テーマの独創性、調査の積極的取り組みや内容の深さが高く評価でき、今後の発展が期待される。

民家型学童保育施設の空間構成に関する調査研究

正会員 三矢勝司 君 (名古屋工業大学)

本論文は、民家を転用した学童保育施設を対象に、空間の特性と活動の中で生じた「淀み空間の発生」について検討したものである。

研究の着眼点は、少子時代を背景に社会性の高いものであり、研究の方法も、施設の図面収集、使用状況調査、ヒアリングを丁寧に行い、これらをカルテとしてまとめており、情報化時代に、ややもすればアンケートなどの安易な方法に流れがちな時代に、十分に評価できるものである。得られた成果は、学童保育に必要な空間を整理し、これらの空間の改善・発展過程を明らかにしている。そのうえで、集団遊びのほか、子どもたちが個別に遊ぶ空間（これを「淀み空間」という）の発生に着目し、こうした空間こそ学童保育の居心地の良さのパラメーターと位置づけ、淀み空間の発生をうながす計画的配慮の必要性を明らかにしている。

卒業論文としては、着眼点、研究、方法、得られた成果の論

理性と社会性などで高く評価できる。

都市の「領域」に関する都市史的研究 東京東神田を事例として

正会員 宮原理子 君 (東京大学)

本論文は、東神田の商業地域が、江戸時代から今日にかけて変遷してきた過程を、主として文献史料を独自の視点で分析し、変遷を規定してきた隠れた支配的因子の時代変化を読み解こうとしたものである。

史料の収集の適切さと、解説の切れ味の良さ、また仮説にもとづいた独自の論理的組み立てが、よくこなれた文章によって運ばれ、説得力のある内容にまつまっている。将来性にも大きく期待したい。

消防活動困難区域の解消方策に関する基礎的研究

正会員 村上正浩 君 (九州大学)

この村上君の取り組んだ卒業論文のテーマは、阪神・淡路大震災の際の大火延焼被害からみても、まことに時宜を得たものといえよう。

論文では、これまで注目されていなかったミクロな地区レベルの消防活動困難区域に注目し分析している。方法は、街区の防災性能を示す指標を使い、多変量解析により街区を要因分析、類型化し、解消策にまでふれている。

論理構成、作業密度などとともに、「解消策」の提言のための多変量解析という明快な目的設定も高く評価した。

港北ニュータウンにおける申出換地の効果に関する研究

正会員 村田夏来 君 (横浜国立大学)

本論文は、港北ニュータウンの土地区画整理事業において、権利者の土地利用の意向によって換地先が決められるという「申出換地」が、全国で初めて運用されたことに着目し、その効果と改善余地について考察したものである。

土地区画整理事業におけるまちづくりが、権利者などの要望と、まちづくりの全体像との整合に強い難点があった原位置換地の現状を改善するものとして、「まちづくり全体・権利主体の両面における意向の実現の可能性」を示唆した論文として高く評価できる。

ただし、こうした成果は、申出換地という研究対象のもつ優位性であって、本研究が対象の優位性以上に、まちづくりの計画制度として独創的な視点をどれだけ切り開いたかという点では不十分さが残る。今後の発展こそ期待される論文である。

ゼオライトパネルの調湿作用に関する夏季における模型実験

正会員 三田村輝章 君 (東北大学)

本論文は、吸放湿性能に優れているゼオライトパネルが住宅

室内の湿度調節にどの程度有効なのかについての基礎的資料を得ることを目的としており、パネルの貼付量を変えた三つの模型家屋を屋外に設置し、加湿を行った場合と換気を行った場合の夏季における室内湿度を長期にわたり詳細に実測して、その効果を明らかにしたものである。

本テーマは昨今各方面で興味を集めている課題であり、提示されたデータはきわめて貴重であるといえる。加湿の制御方法や加湿量の測定に工夫がみられ、また手際よく整理されており、完成度の高い論文である。欲をいえば、理論的な面からの検討が欲しかった。

いずれにしても優秀な論文であり、優秀卒業論文賞に値するものと認められる。

不快グレア評価法の実用化に関する研究 適用範囲の明確化と年齢・色温度補正の提案

正会員 望月悦子 君 (早稲田大学)

本研究は、これまでの不快グレア評価法についてその適用範囲を明確にし、年齢や光源の色温度による補正を加えることを実験結果をもとに提案し、さらに CCD カメラを用いた不快グレア評価システムを提案している。

実験は、光源輝度、光源立体角および被験者の年齢を制御し綿密に行われ、その結果は、これまでの知見とも比較検討され興味深いものである。

もちろん、得られた結論の妥当性吟味は今後に残されるものが多いが、これらの問題点もよく把握しており、卒業論文のレベルを越えた優れたものとなっている。実空間との対応を含めた今後の発展が期待される。

蓄熱槽の有効容積率に関する研究

正会員 茂呂幸雄 君 (工学院大学)

正会員 中島一貴 君 (工学院大学)

本論文は、連続完全混合型蓄熱槽において容量設計の重要な要素である有効容積率について、単槽模型を用いた実験と $k-\epsilon$ 乱流モデルを用いた数値実験にもとづいて、流入速度と有効容積率の関係を求める簡易図表を作成している。

論文内容は、蓄熱式空調システムの基礎事項の整理から始まり、本研究で用いる理論を整理し、既往の実験結果をまとめたうえで、模型実験による有効容積率の算定、数値実験による検討、模型実験の結果を使っての有効容積率の線形性の検討、簡易的算定資料の提案、さらには実物槽への展開について論述されており、400頁にもおよぶ大部な論文となっている。

論文のお手本のような体裁であり、二人の連名であるが最後まで手を抜かないで書かれており、きわめて優れた卒業論文として評価できる。

推薦理由 (優秀修士論文賞)



筒状アトリウム空間内の火災気流性状 自然換気下における開口比と壁面の影響

正会員 大竹正規 君 (東京理科大学)

本論文は、区画壁隅部ならびにアトリウム空間の隅部に発生する火災に着目し、その性状を支配する要因として火源位置・給排気口面積・火源発熱速度を選定し、模型実験により解明を試み、さらに数値解析による再現性を確認したものである。

建築物の大型化と複合化を射程に入れた火災気流の研究であり、防災計画を行ううえで有用な基礎データを蓄積し、今後の発展がさらに期待できる研究である。

金属系構造材の素材特性及び履歴特性に関する研究

正会員 上之郷貴重 君 (名古屋工業大学)

研究者は、14種類の金属系構造材の化学組成と引張試験の結果を分析して、多岐にわたる金属の特性を総括的に表すための素材指標として、修正補エネルギー比が有効であることを示した。さらに、素材試験から得られた素材特性を用いて履歴曲線を再現する手法を展開し、履歴型応力ひずみ曲線を定式化して、多くの構造材について単純引張圧縮繰返し載荷実験を行った結果との対応がよいことを示した。

構造材開発から地震応答解析まで広い範囲に応用できる知見を提供しており、論文としてのできばえを含めて、修士論文としてきわめて優秀である。

繰返し水平載荷を受ける弾塑性多層平面骨組の弓形変形モードの発生成長に関する実験的研究

正会員 立花篤史 君 (京都大学)

本論文は、静的あるいは動的繰返し載荷のもとでは、幾何学的非線形性と塑性変形にともなう材料非線形性による複合効果によって、構造物に臨界状態や不安定現象が生ずるという、上谷・中村の理論を実験的に検証したものである。

不安定現象を実験的に把握するためには周到な実験手法が必要となるが、実験から得られた計測をもとに、骨組の全体的あるいは部分的な変形状態を追跡する実験システムを確立し、実験によって時系列変化を再現し、臨界状態を正確に把握したことは、構造工学の分野において新たな発展をうながすものとして高く評価できる。

弛緩係留された浮遊式建築物の非線形応答の極大値推定と係留設計に関する基礎的研究

正会員 山本禎寿 君 (日本大学)

本論文は、浮遊式建築物を係留系として構成し、非線形波浪外力・係留系の非線形性・粘性減衰力・波漂流減衰力などの非線形要因、有義波高、有義周期をパラメーターとして非線形運動方程式の時系列シミュレーションを行い、運動応答、係留索

張力などについて極大値分布の定量的推定を行い、係留系の安全評価法を検討したものである。

また、これらの近似分布関数を用いることにより、設定した係留条件と破断荷重との関係も推定可能となり、ある条件下での実際設計への適用の見通しをつけている。

したがって、本論文は修士論文として高く評価できるものである。

阿波の農村舞台の空間構造分析 演劇の場の転換機構を中心にして

正会員 川上光洋 君 (東京理科大学)

農村舞台の全国的調査研究はこれまで2度行われてきたが、本論文は、それらから抜け落ちた阿波地方の現存する人形浄瑠璃の農村舞台のうち56棟を詳細に調査している。

単なる構造や歴史的調査ではなく、農村の地域経済と社会構造より舞台成立の条件を追究している。何よりも演劇として演じる者と観客との視点、演出からも舞台の空間構成を解明している。かつて高かったわが国の農村文化を押し置くことができる。

長期間の地域住民との共同調査の努力と独創性と広い知識、論文としての質の高さは大いに評価できる。

近世における浄土真宗寺院本堂の展開に関する研究 本末制度による諸規制との関係を中心に

正会員 川戸章寛 君 (京都工芸繊維大学)

わが国に広く分布する浄土真宗の本堂形式の展開を、「近世社寺建築緊急調査報告」を中心とする豊富な文献資料の分析によって論じている。

本堂の平面形式、縁の形式および一部架構の生成と発展の過程を、本末制度の寺の階層と支配構造との関連で明らかにするのみならず、幕法と寺法、また近世社会全般の変化と末寺の上昇志向など、発展と規制の相互関係がうむダイナミズムをも捉えようとしている。

寺院建築の未解明の部分埋める学術的意義の高い論文として評価できる。今後、寺院実物の調査分析を加え、内容的に彫琢を進め、より充実した研究に高めることを期待したい。

小売商業施設立地モデルの構築

正会員 佐谷宣昭 君 (九州大学)

本研究は、急激な変化をみせている商業の都市圏域での立地動向を、より定量的に把握することができる手法を開発し、それに応じて構築した小売商業施設立地シミュレーションモデルを福岡都市圏に具体的に適用することによって、その有効性を検証したものである。

モデルの予条件設定のための現状分析も的確であり、既存諸案の総合評価をふまえてなされた実用モデルと理論モデルとを融合した、ハイブリッドモデルの提案も独創性に富んでいる。

適用実験を通じた再現性の高さも十分なものであり、新たな

可能性を開いたと考えられる。よって、修士論文として高く評価しうるものと判断する。

マヤマタとダーラースラム チョーラナドゥー様式 ヒンドゥー教寺院建築の設計方法の研究

正会員 土屋 武 君 (早稲田大学)

文献資料に対する綿密な検討と遺構に対する精緻な分析は、高く評価することができる。即物的な、また狭い対象についての研究に墜ちていないのは、視座の広さに裏付けられた遺構に対する慎重なアプローチによるのであろう。本論文作成にあたっての基礎的研究の確かさが感じられる。

精緻な体系に総合化された文献に、明快な分析がどのように積み重ねられていくのか、今後の展開に期待するところ大である。

なお、マヤマタ各項目の考察に若干の整理の余地があるのではなかろうか。また、項目相互の関係を明確に示す手法に工夫が望まれる。

設計組織における標準詳細図の活用に関する調査研究

正会員 中原葉子 君 (東京都立大学)

建築生産プロセスの中で、とりわけ設計段階における標準詳細図の役割に焦点をあてた研究である。特に電子情報への移行が進む中で、その役割の変容を見極めようとする視点は重要である。

設計組織における標準設計図の作成状況、構成内容、使用状況を発注者と設計者の違い、公的組織と民間組織の違いに着目して的確に整理しており、導きだされた結論も明快である。前半の分析で「設計事務所」と「ゼネコン」を一括して「民間」と扱っているのは気になったが、後半のヒアリング調査では区別して分析できている。

テーマ設定、研究方法の妥当性、論文としてのできばえもよく、大変質の高い修士論文といえる。

修復型まちづくり論の再構築 被災地神戸・真野地区のまちづくりの実証的研究

正会員 中村正明 君 (東京大学)

本論文は、震災直後の神戸市真野地区において、著者が1年間現地に住み込みながら復興計画に参加活動した経験や成果をもとにまとめられた論文である。

住民参加や街区単位の計画といった、地区単位の修復型計画の方法・プロセスにかかわる今日的課題に関して、自らの現地での経験にもとづきながら、その方法論を展開している点は説得力がある。特に、住民主体で事業を進めていく計画理念のもとで、街区を単位としたフィジカルな整備手法については、明快で緻密な独自の計画論が展開されている。

客観的なデータにもとづいた調査研究としてではなく、計画提案型の論文としてのユニークな点が高く評価される。

ヴィオレ・ル・デュク『中世建築事典』の構造に関する研究

正会員 三井禎幸 君 (東京大学)

「事典」を研究対象に選んだ場合、全体的に捉えようとするれば漠然とした内容紹介的な論調になったり、逆に深く分析しようとするればどうしても項目構成から制約を受けて記述が散漫かつ断片的になりがちである。そうした陥穽を避けるためであろうか、既往研究の分析に比較的多くの枚数を割いて論点を絞り込み、対象の構造的分析に入っている。その論文構成は秀逸である。

「事典」という総合化された対象を総合的に捉える試みとして、高く評価できる。文章力も優れており、デュクの世界を内側からより豊かに描き出す方向に、さらに研究が発展することを期待したい。

生活構造からみた都心と郊外の再定義

正会員 守谷謙一 君 (東北大学)

本論文は、仙台市を例にとり、居住者の行動パターンから都心と郊外という領域の位置づけの再定義を試みた研究論文である。

モータリゼーションにより東京や大阪などの大都市よりもダイナミックに都市構造が変容している地方中核(中核)都市を対象とした研究として、生活者の行動調査を行い、その分析をもとに既成の都市モデル概念への問題提起を行っている。こうした都市圏では、もはや購買活動の多くが郊外に移行しつつある実態の中で、都心の役割が問われている。

居住者の行動調査から今後の地方都市の都市計画を考えるうえで、貴重な調査成果を提示した内容が高く評価された。

実歩行に対応する衝撃シミュレータの開発と住宅床の振動応答特性に関する研究

正会員 石井健太郎 君 (日本大学)

本研究の密度の高さには驚かされ、優秀修士論文賞に十分値するものである。著者の並々なぬ努力に頭が下がるものである。

住宅床を人が歩行する時の、床の時間・空間・周波数領域での動的物理量(動的ばね定数、変形特性、インピーダンス特

性)から人の歩行を捉え、これを模擬する歩行ロボットに似た装置を開発している。これと従来の簡便な模擬装置を比較し、従来の装置の有効性も確認している。これらの装置を伝統的木造建築を含む様々な住宅床に適用し、床構造ごとの特性を分析している。

今後は、床構造ごとに適正な断面構造を、居住性能の観点から特定していくことが期待される。

Particle Tracing による局所領域換気性状の同定に関する研究

正会員 伊藤一秀 君 (東京大学)

精密な室内気流模型実験をベースに、流体数値シミュレーションの利点をいかした室内空気挙動の予測計算を通じて、居住域換気性状の一般的指標の整備が可能としている。重要な換気の質の問題として注目したい。

内容の骨子は、汚染質(Particle)の局所領域訪問率・平均訪問率、平均滞在時間を定義し、それらと室の容積から局所領域排出換気量を定義し、Particle Tracingと標準 $k-\epsilon$ モデルによる上記定義値の計算をして結果を比較し、前者から上記定義値を計算解析でき、後者から簡易に求められるとしている。良く整理され読みやすく書かれている。

3次元空間での経路探索行動に環境条件が与える影響

正会員 串山典子 君 (東京工業大学)

本論文は、複数階にわたる上下方向への移動が、経路や方向の認識にどのような影響をおよぼすかについて、4つの建物における探索行動実験によって明らかにしたものである。

それらの実験の結果、上下方向への移動後の地点で情報が得られることが重要であることを見いだしている。興味深いユニークな論文である。このような研究は、目的に適した場所が実際に存在しないとやりにくいと考えられる。したがって今回の場合、人間行動の性質を確かめるための場所探しが重要であり、その苦勞がうかがえた。

欲をいえば、これらの研究が空間環境設計にどのように生かせるかという目的性についての考察が欲しかった。いずれにしても優秀な論文であり、優秀修士論文賞に値するものと認められる。